

国、そして人々の心の再建を



駐日ルワンダ共和国特命全權大使
エミール・ルワマシラボ

1994年、国民の10人に1人、約100万人が、わずか100日間に虐殺されたルワンダ。誰もが目を疑った悲劇から13年、復興に向けた勇猛果敢な取り組みは、世界の人々に勇気と希望を分け与える力さえ秘める。

日本政府がルワンダへの協力を本格化した2005年※、エミール・ルワマシラボ大使は来日した。西洋の工業化を日本が受け入れた江戸から明治への変遷は特に「工業化の初期段階にあるアフリカ諸国の参考になる」と日々書物を読みあさる一方で、日本の農家経営は「生きた教訓」と地方行脚にも積極的だ。ルワンダと日本の両国を見つめるエミール大使に、復興の歩みと日本への期待を聞いた。

(続きは裏ページへ)

※日本の対ルワンダ支援は、治安悪化などの理由で1993年以降はJICAによる研修員受入事業や国際機関を通じた支援を中心に実施。2003年第3回アフリカ開発会議を機に二国間協力を本格再開した。

「ルワンダ人皆が共通の 目的意識を持つことが重要」

駐日ルワンダ共和国特命全権大使

エミール・ ルワマシラボ

Emile Rwamasirabo

1951年ルワンダ・ブタレ生まれ。医学博士。セネガル・ダカール大学医学部卒業後、フランス・リール大学に留学。リールがんセンター、ムラゴ教育病院(ウガンダ)キガリ病院(ルワンダ)院長などの職務を経て、98年ルワンダ国立大学学長。2005年2月から現職。

1994年の大虐殺(ジェノサイド)でルワンダは崩壊しました。しかしそれを乗り越え、復興しなければならなかった私たちは、国の再建と同時に、人々の心を再建することが大切だと考えました。まず重視したのが、一人一人がルワンダ国民としてのアイデンティティを持つことです。以前は身分証に部族が記され、雇用や教育など基礎サービスの享受も部族によって区別されましたが、今はすべて能力主義です。また、権力分散のメカニズムが導入され、選挙で敗れた政党の議員も要職に就くことができます。さらに地方分権化や女性の政治参加を促進しています。これらを進める上で最も重要なのは、皆で国を再建していくという目的意識を国民全員が持つこと。それが国づくりのベースになると私は考えています。

国土が小さく、資源も乏しいルワンダにとって、“人”は大切な資産です。ですからジェノサイドの直後、私たちは人材開発に努め、その結果、初等教育を受けられる子どもは2倍に、中等教育と高等教育は5倍以上に増えました。そして現在は、職業訓練など専門技術の教育にも力を入れています。また、国民の84%が地方で農業に従事しているため、農業の近代化も重要です。コーヒーや紅茶産業以外にも、主要な農作物の高価値化で生産高の向上を目指さなければなりません。

さらに経済政策の柱としてICT(情報通信技術)開発も積極的に行っています。工業化の初期段階になぜICTか、と疑問の声もありますが、人々がさまざまな情報に触れ、閉ざされていた心を開き、

新しい価値観を受け入れる心を持ってもらいたいと私たちは考えたのです。またルワンダは「千の丘の国」と呼ばれ、美しい丘陵地が多く、野生のマウンテンゴリラも多数生息しています。そうした豊かな自然は観光にも生かすことができ、観光産業の振興には、日本からの投資にも大きく期待しています。

これらの開発ビジョンを実行していくためにはリーダーシップが欠かせません。その意味で、ポール・カガメ大統領は国民に共通の目的意識を持たせることに成功しつつあります。また、過去7年間の経済成長率も6~9%という高水準を維持しています。他方で、いまだ国民の約半数が1日1ドル以下で生活する現状もあり、貧困削減が大きな課題です。

JICAは公共輸送や農村開発の分野でルワンダに協力しています。緒方貞子理事長の提唱する人間の安全保障を実現するには、物質的な充足のみならず、社会的・精神的な安らぎを人々に与える必要があります。ただし現在のルワンダでは、その前に政府が安定することが不可欠で、この面でもJICAに協力いただきたいと思います。

緒方理事長は、ルワンダ人皆が尊敬する“友人”です。英語のことわざで「まさかのときの友は真の友」とありますが、彼女が国連難民高等弁務官だった時代、国境付近にいた300万もの難民に迅速な帰還を促したことで、6カ月後に人々は定住先で家を建設し、生活を取り戻しました。紛争直後に国をどう安定させていくか、ルワンダの経験は紛争を抱えるほかの国にも参考になると考えています。

